「小原かご」を伝承する
― 私が伝えたい小原かごの魅力 ―

森と木のクリエーター科　木工専攻　　矢木　満夫

１．　はじめに

研究主題は「小原かごを伝承する」である。小原かごと名付けられたかごは、若いイタヤカエデの幹を割裂いて作ったテープ状のひご（「ハゼ」と呼ばれる）を、ござ目に編んだかごである。カエデの木肌の白さが美しいだけでなく、極めて軽いのに「人が座っても壊れない」といわれるほど丈夫である。

このかごは、滋賀県湖北地域、現在の地名では長浜市余呉町の高時川源流域にかつてあった小原（おはら）集落で作られ、湖北一帯に広く流通していた。集落に伝わる伝説によれば、「８００年ほど前の鎌倉時代、小原集落の山中に訳あって隠せいしていた「白子皇子」が、親切にしてくれた村人たちにかご作りを教えた」ということである。こういう伝説が残っていること自体が、この集落でのかご作りの歴史の深さを表している。

冬場の農閑期の副業として十数戸の集落のほとんどが何らかの形でかご作りに関わり、中には専業にする人もいたらしい。しかし、他の多くの手仕事同様、1950 年代からの「高度経済成長」「エネルギー革命」、そしてプラスチック製品の普及によって集落のかご作りは消滅してしまった。

30 年あまりの時を隔てて、小原集落を含む高時川源流域に計画された丹生ダムの流域調査で「小原かご」の存在が掘り起こされた。唯一かご作りを習い覚えていた太々野功氏によって小原かごが復活した。講習会も開かれたが後継者はいない。

私自身は 2018 年の秋にこのかごのことを知り、一般向けの「小原かご講座」に参加した。それ以来このかごの魅力に取り憑かれ、自分なりに製作にとり組む中で、「このかごを次代に残したい」という思いを強くしていった。仕事をリタイアし森林文化アカデミーに入学したことを契機に、本格的に小原かごの伝承にとり組もうと考えた。

伝承のためには、小原かごの文化的価値を正しく理解すること、口先でなく自分自身の身体を通して技術を継承すること、小原かごの魅力を広く知ってもらうこと、次の世代に繋いでいくしくみを作ることなど、総合的なとり組みが必要である。とても、２年間で達成できるようなものでもない。

そこで、今回の課題公表会の発表テーマは、「私が伝えたい小原かごの魅力」とし、私がこの２年間にとり組んできたこと、そしてその中で発見した小原かごの魅力をお伝えすることにした。とり組みの中間発表としての意味合いと、ささやかな民俗技術の伝承が含み持っている現代的意義を少しでもお伝えできれば幸いである。

２．小原かごにとりつかれた私がとり組んだこと

① 　きちんとした技術を身につけたい。そのために、唯一の伝承者太々野功さんに指導をお願いした。また、自宅アパートの一室を作業場にし、日々の生活の中にかご作りがある環境を作った。

② 　製作にとり組む中で、かご編みの技術の未熟さを感じていたので、習熟の場を求めた。桧笠・イチイ笠で有名な「飛騨一之宮宮笠愛好会」、鵜篭職人が主宰する「美濃竹細工教室」に入会させていただけた。

③ 　自分の製作の用と将来開くつもりの講座・教室のために、鍛冶職人と連携しながら専用の刃物を数度にわたって発注、試用した。

④ 　小原かごとはどういうものなのか、編組製品の中での位置づけを自分なりに定めたかった。そのために、木の剥ぎ材を使ったかごの分布と特徴を調査した。現在もイタヤ細工のかご・箕が作られている秋田県と、カエデやミズナラの剥ぎ材が多く残る岐阜県周辺の郷土資料館・民俗資料館を訪ね、可能なかぎり担当の方や、かごについてご存じの方からお話を聞いた。

⑤ 　素材となるカエデを探し求めた。山林所有者の方、林業関係の専門家にお願い・相談をする一方、可能な範囲では自分でも探した。

しかし、材として生産・流通するようなものではないし、勝手に伐れるものでもない。手助けをいただきながら、四苦八苦は続いている。

⑥　小原かごを伝承していくためには、個人のとり組みではなく、基盤となる組織がぜったいに必要だと考えていた。地元の「小原かごを復活させる会」は実質活動休止状態になっており、伝承者がひとりで小原かごの伝統を支えている状況であった。しかし、地方でその地域の文化に関わるとり組みを行う場合、「余所者が勝手なことをしている」ように見えることは、厳に慎まなければならない。なかなか足が踏み出せなかったが、2022 年 10 月、地元の方と共に伝承サークル「小原かご研究会きつつき」を発足させることができた。

３．私が伝えたい小原かごの魅力

①　かごの向こうには里山の現状が見える

小原かごの魅力である白さはカエデ材の美しさである。ところが、現状はかごに適するカエデの木がない。焼き畑、薪炭生産などによって更新されてきた里山の恵みがかごの素材になった。放置され、６０年生の大径となったカエデしかなく、それさえも入手が難しいことは今の里山の抱える問題の象徴である。一部で始まっている里山林の循環利用のとり組みとの連携に希望を見いだしている。

②　国内に２カ所、１万年来のスーパー伝統工芸

木の剥ぎ材を編み組みしたかごは、約８０００年前の縄文早期の東名遺跡から大量出土している。その複雑な編み組織の完成度から、それ以前の長期間の蓄積が想定されている。小原かごは、スーパー伝統工芸といえる。しかし、その技術が今に伝えられ作られているのは、国内では秋田と滋賀の２カ所のみである。

③　ちょっと変わった独自の刃物「ホウチョウ」

小原かごのハゼ（剥ぎ材）加工には独自の片刃のナイフを使う。形状は片刃の小出刃包丁である。これ一丁で割り、剥ぎ、仕上げ削りのすべてをこなす。集落に独自の道具が発達したのは、村の産業としてかご作りが行われたことと深い関わりがある。

④　「木を剥ぐ」体験は魅惑的

小原かごの軽さ、丈夫さは木を剥いで編むことによっている。鉈と木製の矢を使って、丸太を半々に割っていくことを繰り返して棒状にする。きれいに半々に割るコツは「強きを挫き、弱きを助ける」。材料が太い段階では、矢を入れたまま斜めにして太い方を槌で叩く。細くなってからは、刃物や指先の力加減で厚い方を押して均等に割り剥ぐ。感覚的には、竹は「裂く」、カエデは「めくる」というくらいの手応えの違いがある。きれいに剥いでいけているときの剥ぎ面の美しさ、手の感触は、体験してみないと味わえない独特の陶酔感を伴っている。没我の境地である。

⑤　ちょっとどきどき、刃先を自分に向けて削る

小原独特のホウチョウ遣いとして、刀身をつまみ持って刃の先端付近をつかってハゼ（剥ぎ材）を削る動きがある。左手親指を右手親指に添えてストッパーにしながら、手前に鉋がけをするように引くのである。このように表面を仕上げ削りするのは一般的ではなく、確実なのは秋田と小原かごだけである。

⑥　かご作りをすると人生が深まる

かごの組織（編み方）をごく大まかに分類すると、「四つ目」「網代」「ござ目」となる。調査した範囲では、多くの地域の剥ぎ材のかごは「網代」に編む。ござ目のかごは、小原かごと隣接の旧徳山村、石川県白峰村の一部のかごに見られる程度である。

無心にかごを編んでいると、ひとつひとつの手順の大切さがよくわかる。そして、その前の段階の加工の不十分さ、大切さも身にしみてわかる。こうして無心に編む時間は、自分自身を省察する時間でもある。

４．まとめにかえて

小原かごについてとり組む中で、次のような思いが日に日にふくらんできた。

「近代化」の中で私たちが捨ててきたものは、「自然と上手につきあいながら豊かに生きる」生活だったのではないか？そうであるなら、失われた（失われつつある）山の知恵を現代に生かすことは、真の豊かさを考えるヒントになるのではないか？

ほんのささやかな小原かご作りではあるが、その歩みとこれからを考えることは、次の時代をよりよいものにすることとつながっている。次の時代、次の社会をどのようなものにするのか、それは今を生きる私たち自身の想像力と選択にかかっている。そのことを信じて、かごの地元長浜市余呉に根ざして、無理せず、焦らず、投げ出さず、そして一心に、小原かごを次代につないでいきたい。